

青年中期におけるセクシュアルマイノリティの受 容

— 海外居住経験および海外文化への関心に着目して —

工藤藍

(愛媛大学大学院心理発達臨床専攻)

研究の目的

近年、日本ではLGBTという言葉が注目を浴び始めている。だが先進国の約7割で同性婚あるいはパートナーシップ制度が可能になっていながら日本では未だ同性婚が認められていないことなどから、日本におけるセクシュアルマイノリティに対する取り組みは遅れていることが明らかである。

また、多くの性同一性障害当事者が、自殺念慮の発生時期として第二次性徴の時期をあげていることや(中塚, 2011)、同性愛者であった大学院生の自殺事例のような周囲の人間の無理解が原因の事件がすでに起きていることから(『朝日新聞』, 2019)、第二次性徴の時期である中学校・高校を主として学校現場での適切な対応が求められている。

よって卒業論文では、セクシュアルマイノリティ当事者に対する学校現場での適切な対応を模索することを目的とし、第二次性徴の時期である青年中期におけるセクシュアルマイノリティに対する理解度と受容態度を、海外居住経験および海外文化への関心の高さに着目して調査した。

方法

神奈川県横浜市内の中高一貫K学園に在学する高校生約300名を対象とし、「LGBTの知識と理解を調査する質問項目」と「海外文化への関心の高さを調査する質問項目」からなるWEBアンケート調査を行った。

結果

LGBTそれぞれを「知っていますか」という質問項目に対し、「知っている」「なんとなく意味が分かる」「聞いたことがある」「全く知らない」の選択肢から回答を求めたところ、レズビアンやゲイに関しては「知っている」「なんとなく意味がわかる」と答えた割合が約98%となり、かなり高い。それに対し、バイセクシュアルでは「知っている」「なんとなく意味がわかる」と回答した人が約90%、トランスジェンダーでは85%を下回っており、レズビアンやゲイと比較して理解度が低いことがわかる。また、LGBT

のなかではトランスジェンダーに対する理解度が最も低いこともわかる。

同様に、LGBTそれぞれを「どう思いますか」という質問項目に対し「いいと思う」「いいとも受け入れがたいとも思わない」「そういうものには関心がない」「受け入れがたい」「その他」の選択肢から回答を求めたところレズビアンやゲイに対して「いいと思う」または「いいとも受け入れがたいとも思わない」と回答した人は全体の約95%であった。それに対し、バイセクシュアルとトランスジェンダーに対し「いいと思う」または「いいとも受け入れがたいとも思わない」と回答したのは約90%であった。バイセクシュアルでは「その他」を選択し追記として「聞いたことがないので分かりません」という回答があり、トランスジェンダーでも「その他」を選択し追記として「あまりどういうものか知らない」という回答があった。

考察

調査の結果、大きく分けて3つのことが示唆された。1つ目は、LGBTに対する理解度は高くないということである。高校生の持つLGBTの知識は正しいとは言い切れず、これはLGBTの情報源であるメディアの影響を受けていることが考えられる。

2つ目は、LGBTに対して受容的であり、また受容的な社会になることに肯定的であるということである。これは、近年セクシュアルマイノリティに関連したニュースなどが高校生の認知しやすい場で取り上げられていることや、セクシュアルマイノリティに関する社会活動がされていることなどが背景にあると考えられる。

3つ目は、LGBTに対する理解・受容と海外文化への関心の高さの関連性は見られなかったということである。このような結果となった要因としては、調査対象者が高校生であるため今まで海外文化の影響を大きく受けてこなかったこと、また質問項目が適切でなかったことなどが考えられる。